福田徳三とドイツ歴史学派経済学
―カール・ビュッヒャーとの関係を中心に―*

Einfluß der deutschen Historischen Schule auf die Entstehungsphase der Wirtschaftsgeschichtswissenschaft in Japan:
Fukuda Tokuzos Rezeption und Kritik der Wirtschaftsstufentheorie von Karl Bücher

森　宜人

Mori Takahito

はじめに

本稿では，ドイツ歴史学派経済学が福田徳三（1874 － 1930 年）に及ぼした影響と，同学派に関する福田の認識及び評価を，カール・ビュッヒャー Karl Bücher（1847 － 1930 年）と福田の関係に焦点をあてつつ素描する。

ここで改めて紹介するまでもなく，福田は日本の社会科学の黎明期に，理論から政策，歴史にいたる経済学の礎を築き，本学の前身にあたる東京高等商業学校及び東京商科大学と慶應義塾で数々の後身を育て上げた文字通り「日本の経済学の祖」である。また日本社会の「改造」が盛んに論じられた大正デモクラシー期に「生」の価値基準のあり方をめぐる省察を通じて，「生存権」の経済学を提唱したことでも知られる。

ビュッヒャーは，グスタフ・フォン・シュモラー Gustav von Schmoller（1838 － 1917 年）及びルーヨ・ブレンターノ Lujo Brentano（1844 － 1931 年）と並ぶ，ドイツ歴史学派経済学の代表的人物であり，その経済段階発展論が黎明期の日本の経済学及び経済史学に多大の影響を与えたこともよく知られている。福田とブレンターノの関係については言及される機会が多かったが，ビュッヒャーとの関係はこれまでほとんど論じられてこなかったため，本稿で取り上げる次第である。

1．『福田徳三著作集第６巻　経済史研究』について

筆者も属する福田徳三研究会は，福田が 1925/26 年に同文館より刊行した『経済学全集』（全６集８冊）を底本とする『福田徳三著作集』（全 21 巻，信山社）の編集に取り組んでいる。2015 年に刊行が開始された『著作集』のうち 2022 年１月初めの時点で，すでに 10 冊が出版された。筆者は現在，杉岳志氏及び夏目琢史氏とともに『著作集第６巻　経済史研究』の刊行

* 本稿は，すでに脱稿した拙稿「解題　福田徳三と西洋経済史学」杉岳志・森宜人・夏目琢史（編集）『福田徳三著作集第６巻　経済史研究』（信山社より出版予定）に加筆・修正を施したものである。また本稿の要旨は，一橋大学社会科学古典資料センター主催令和３年度西洋社会科学古典資料セミナー「古典資料研究」（2021 年 10 月 27 日，オンライン開催）において発表した。転載を許可していただいた信山社と，貴重な質問・コメントを寄せていただいたセミナー参加者に深謝する。

を準備中である。この第 6 巻に収録予定の論考の内，西洋経済史学の領域に属するものは次の 11 篇である。

(1)「カエサル及タキトゥスによる古独逸土地共有制度（初出：原題「シーザー及タキトスニ依ル古独逸土地共有制度ニ関スル若干ノ疑問)」矢作栄蔵編『経済論叢―和田垣教授在職二十五年記念―』有斐閣，1914 年)。
(2)「経済進化論緒言」，(3)「人類原始の経済状態」，(4)「自然人の経済」（初出：後二者は Karl Bücher, *Die Entstehung der Volkswirtschaft*, Aufl. 3, Leipzig 1901 の第 1 章及び第 2 章の翻訳であり，「経済進化論緒言」はその解題。三論考をまとめて「史的研究　経済本論」として雑誌『経済世界』第 11 号（1902 年 12 月）－第 23 号（1903 年 11 月）に連載)。
(5)「農制史雑考」，(6)「中古商業・交通史雑考」，(7)「タイシング及びフランク・プレッジ」「工業史雑考」，(8)「『ギルド』の辞義と紀元」，(9)「商人『ギルド』」，(10)「クラフト・ギルド」（いずれも『経済大辞書』同文館，1910-1916 年の項目)。
(11)「ラグーサの商業帳簿（原題「ラグサノ帳簿ニ現ハレタル伊太利経済史ノ一節」)」（『経済学商業学国民経済雑誌』第 3 巻第 6 号，1907 年 12 月）

この他に，第 6 巻に所収予定の「穂積博士の隠居論を読む」（初出：『三田学会雑誌』第 9 巻第 6 号（1915 年 6 月）－第 10 号（1915 年 10 月）に連載）でも，ドイツのグルントヘルシャフト及びグーツヘルシャフトにおける農民の相続制度についてまとまった言及がなされている。この論考はタイトルの示す通り書評論文であるが，福田自身が「単に一著書の批評にあらず，著書の提出したる問題を本とし，多少の施策を積みたる微弱なる研究」と位置づけているように，穂積陳重の『隠居論』第二版（有斐閣，1915 年）の批判的検討を通じて，高齢者の生活保障のあり方をめぐる議論に一石を投じたものである。

2．草創期の社会経済史学と福田

さて，1930 年の社会経済史学会の発足と，翌年の同学会機関誌『社会経済史学』の創刊をわが国における経済史学確立のメルクマールとするならば，「穂積博士の隠居論を読む」を含む前述の諸論考が公刊された 1900 － 1910 年代はその草創期にあたる。土肥恒之によれば，この時期から 1920 年代にかけて，東京帝国大学，京都帝国大学，慶應義塾大学，そして東京高等商業学校・東京商科大学において徐々に経済史研究の制度的基盤が形成され，そうした潮流が社会経済史学会の創設へと収斂したのである [1]。

この草創期の起点は，福田が留学先のミュンヒェンにおいてブレンターノの慫慂により『日本経済史論』（原著：*Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan*, Stuttgart 1900）を著した 1900 年に求められる。原著の表題に示されているように，『日本経済史論』の一貫したモチーフは経済発展段階論に即して日本における「国民経済」の成立過程を考察することにあった。同書は 4 章から構成され，第 1 章では「大和民族の日本移住」に始まる「原始時代」，第 2 章では大化の改新によって幕を開ける「帝権拡張時代」，第 3 章では藤原氏の権力掌握を契機とする「封建時代」の展開，第 4 章では徳川幕府による「専制的警察国家の時代」が描か

[1] 土肥恒之『西洋史学の先駆者たち』（中公叢書，2012 年)，第 2 章。

れる[2]。

ドイツ語で書かれた『日本経済史論』は，福田の弟子の1人であった坂西由蔵（1877 − 1943年）の手によって邦訳され，1907年に大阪の寶文館から出版された。日本語版『日本経済史論』は，1927年の改訂第6版にいたるまで20年間にわたって版を重ねることとなる[3]。このことは，社会経済史学の草創期から確立期における同書の反響の大きさを物語っている。福田によって「ドイツ歴史学派の発展段階説がうつしうえられることによってはじめて一定の方法と体系をそなえた『経済史』学が日本にも存することになった」[4]のである。また，1923年に『英国産業革命史論』を著した上田貞次郎（1879 − 1940年）や，社会経済史学会の設立に貢献した野村兼太郎（1896 − 1960年）をはじめとして経済史学の草創期に活躍した人物のなかには福田の影響を直接受けた者が少なくなかった。だが，福田自身には，『日本経済史論』を除くと，「西洋日本を問わず纏まった経済史研究と呼ぶべきものはない」[5]。

しかしながら，「経済進化論緒言」で言及されているように，福田にとって経済史とは，「経済学の根本基礎」であった。それは，「従来経済学上の金科玉条となせる事項も，この史的研究の鋭鋒には当たり難くして，ことごとくその価値を失わざるを得ざる」ためである[6]。この方法論を確立したのが，「進化発展の大則を初めて経済学の上に適用し，もって在来の経済学をしてその面目を一新せしめんとする」ことに主眼を置く歴史派経済学であった[7]。それゆえに福田は，「経済原論」に対して，歴史学派に基礎を置く「史的研究」に「経済進化論」の名称を用いたのであり，また，「今日において確定不動ほとんど一転の疑いを容れざるが如き各般の経済現象も，過去においては全く存在せざりしもの多かるべく，その将来に持続して千載不変なるものまた少なかるべし」ことを明らかにした点に同学派の効用を求めた[8]。

3．福田とビュッヒャー

歴史学派経済学のなかでも特に福田が高く評価していたのが，ビュッヒャーである。1897年，留学のため渡独した福田は，ビュッヒャーのいるライプツィヒに向かった。福田は当初，ビュッヒャーではなく，いわゆる旧歴史学派の代表的人物ヴィルヘルム・ロッシャー Wilhelm Roscher（1817 − 1894年）の下で学ぶことを計画していた。だが，すでに1894年にロッシャーは亡くなっていたため，ミュンヒェンに移るまでビュッヒャーに師事することとなった。福田のライプツィヒ滞在期間は1897年5月からのわずか4ヵ月に過ぎず，同年9月にはミュンヒェ

---

[2] 『日本経済史論』の詳細と日本経済史研究におけるその史学史的意義については，前掲『福田徳三著作集第6巻　経済史研究』に所収予定の夏目琢史氏の解題を参照のこと。

[3] 福田徳三『経済学全集第3集　経済史経済学史研究』（同文館，1925年）に収められた『日本経済史論』は，福田自身の手によって改めて翻訳された自訳版である。

[4] 増淵龍夫・渡邊金一「経済史」『一橋論叢　一橋大学八十周年記念号：一橋学問の伝統と反省』第34巻第4号（1955年），141頁。以下，引用にあたっては，旧漢字を新漢字に改めるなど一部改変を施した。

[5] 土肥恒之「大正期の欧州経済史学と福田徳三」『一橋論叢』第132巻第4号（2004年），427頁。

[6] 福田徳三「経済進化論緒言」同『経済学全集第3集　経済史経済学史研究』（同文館，1925年），468頁。

[7] 同上，473頁。

[8] 同上，468，471頁。

ン大学のブレンターノのもとに移ることとなる[9]。しかしながら，ライプツィヒ滞在中にビュッヒャーから大きな影響を受けたことは，「経済進化論緒言」のなかにある，「予が経済学における，まず心眼を開かれしは実に〔ビュッヒャー〕先生にして，なかんずく右書〔『国民経済の成立』〕は莫大なる刺激を研究の首途において与えられたり」[10]，という一節からうかがい知れる。

ビュッヒャーは1847年2月16日，ドイツ連邦に所属するナッサウ公国（現ヘッセン州）のキルベルクKirbergに生まれ，ドイツ第二帝政の創建期にあたる1866－1870年にボン大学とゲッティンゲン大学で歴史学及び古典学を学んだ。1870年にボン大学で博士号を取得し，1878－1880年には『フランクフルター・ツァイトゥングFrankfurter Zeitung』（現在の『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥングFrankfurter Allgemeine Zeitung』）の記者（社会政策問題デスク）をつとめた。そして，1880年に教授資格論文を提出した後，ミュンヒェン大学私講師や，バーゼル大学教授（経済学･統計学），カールスルーエ工科大学教授（国民経済学）などを経て，1892年にライプツィヒ大学の国民経済学講座教授に就任した。ビュッヒャーの研究分野は古代史，中世都市史，各種社会統計の編纂事業など多岐にわたるが，『フランクフルター･ツァイトゥング』の記者をつとめていた経歴から，ドイツにおける「新聞学Zeitungswissenschaft」の草分けとしても知られている。また近年，経済学説史において歴史学派を再評価する動きがみられるが，ビュッヒャーについては，音楽と労働の関係を分析した『労働とリズム』にみられる経済人類学的側面に大きな注目が集まっている。これらの学問的業績とならんで，ビュッヒャーはジャーナリストとしての経歴を背景に，関税政策や，労働者保護政策，手工業者救済政策，そして都市問題をはじめとする時事問題についても積極的に発言した[11]。

ビュッヒャーの令名を高めたのが，1893年に上梓された『国民経済の成立』であることは言を俟たないであろう。周知のようにビュッヒャーは，同書によって，「閉鎖的家内経済geschlossene Hauswirtschaft」，「都市経済Stadtwirtschaft」，そして「国民経済Volkswirtschaft」の三段階に区分した独自の経済発展段階論を打ち立てた。ビュッヒャーの発展段階論においては，財が生産者から消費者へと行き渡るまでの距離が段階区分の基準となり，この基準に従って，「家内経済」は「純粋な自己消費用生産ないし交換無き経済の段階」，「都市経済」は「顧客生産ないし直接交換経済の段階」そして，「国民経済」は生産者と消費者の間に複数の経済主体が介在する「商品生産ないし貨物流通の段階」と定義される。

『福田徳三著作集第6巻』に収録される「人類原始の経済状態」と「自然人の経済」は，ビュッヒャーの『国民経済の成立』―底本は1901年に出版された第3版―を構成する2つの章の翻訳である。当初は同書の全篇を訳出することが計画されたが，初出掲載誌の『経済世界』の廃刊に伴い福田の訳業は未完に終わっている。その後，全篇の邦訳は權田保之助（1887－1951年）の手によって果たされることとなる。權田は『国民経済の成立』第9版（1913年刊行）を底本とし，『経済的文明史論（国民経済の成立）』の邦題によって1917年に内田老鶴圃から出版

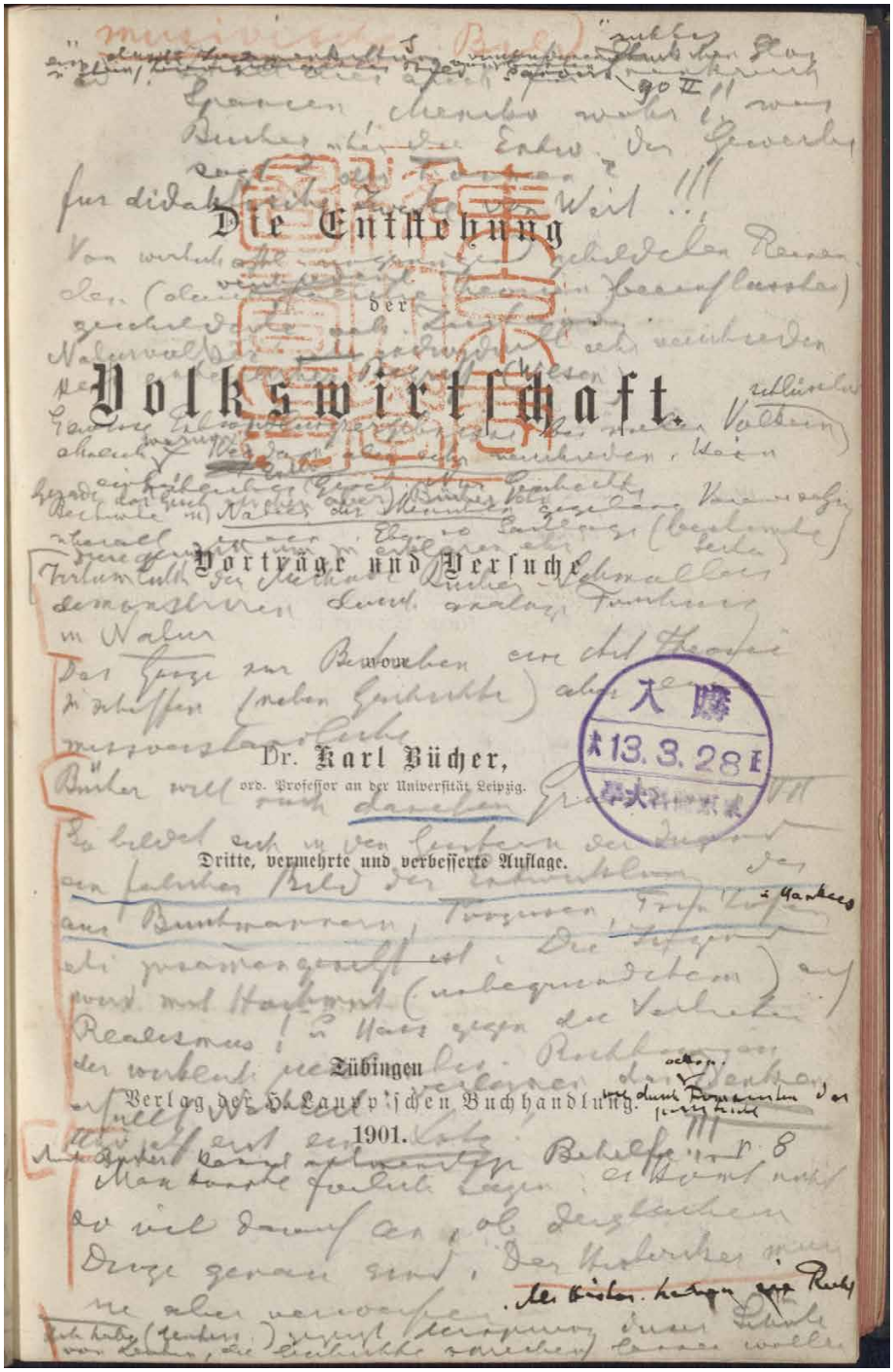
---

[9] ドイツ留学中の福田の足跡については，西沢保『マーシャルと歴史学派の経済思想』（岩波書店，2007年），515-531頁を参照。

[10] 福田「経済進化論緒言」，467頁。

[11] ビュッヒャーの経歴や研究内容の概観については，次の文献を参照のこと。Jürgen Backhaus, *Karl Bücher. Theory – History – Anthropology – Non Market Economies*, Metropolis-Verlag: Marburg 2000; Beate Wagner-Hasel, *Die Arbeit der Gelehrten. Der Nationalökonom Karl Bücher (1847-1930)*, Frankfurt/New York 2011, 拙稿「ドイツ社会政策学会における近代都市論―K. ビュッヒャーの所論を事例に―」『経済系』第240集（2009年）。

写真　『国民経済の成立』第３版（1901年刊行）の標題紙



Die Entstehung
der
Volkswirtschaft
Vorträge und Versuche
Dr. Karl Bücher,
ord. Professor an der Universität Leipzig.
Dritte, vermehrte und verbesserte Auflage.
Tübingen
Verlag der H. Laupp'schen Buchhandlung.
1901.

注）写真は一橋大学社会科学古典資料センターのメンガー文庫の蔵書であり，書き込みはカール・メンガー Karl Menger（1840 － 1921 年）本人の手によるものと考えられる。
出典）Karl Bücher, *Die Entstehung der Volkswirtschaft : Vorträge und Versuche*, 3. verm. und verb. Aufl, Tübingen 1901

した[12]。

草創期の日本の社会経済史学界において同書は大きな反響を呼び，4 年後の 1921 年には同じく内田老鶴圃から訂正改刻第 2 版が出版された。『国民経済の成立』の原著は版を重ねるごとに収録される論考の数が増え，途中から 2 巻構成となる。そして，第 1 巻の第 16 版（1922 年刊行）の訳本が同じく權田保之助によって『増補改訂　国民経済の成立』として栗田書店より 1942 年に出版され，第 2 巻は第 8 版（1925 年刊行）が淡川康一（1902 − 1977 年）の訳により『国民進化経済論第 2 集』として雄渾社より 1958 年に刊行されることとなる。

『国民経済の成立』で提示された経済発展段階論について福田は，「経済進化論緒言」のなかで「先生の新学説は学問界に一革命を喚起したるものとして永く忘るべからざる所に属す」[13]と評しているが，その内容については多くを語っていない。ビュッヒャーの学説について，福田のより踏み込んだ批評がみられるのは『流通経済講話』（1925 年刊行）の第 3 章である。それによれば，イギリスの古典派経済学が「一切の注意を唯だ財の流通（財の分配を含んで）にのみ集中し」,「近世の流通経済の観察にのみ囚われ」た学説であったのに対して，ビュッヒャーの発展段階論は「国民経済なるものは一千年に渉る歴史的発展の産物」であることを明らかにしており，これを福田は長年,「経済史研究の結果を経済理論に応用す可き唯一の途」として「金科玉条と仰ぎ」みていた[14]。

4．発展段階論の超克から地域主義へ

だが，「人類原始の経済状態」と「自然人の経済」で素描された，「各個人は全く孤立して其の食料を探求し」,「男も女も，銘々唯だ自分の得た獣，草根，果実等を自分一人で食い盡す」ような「個人的食料探求時代」から，発展段階論で対象となる，「財の授受に依って媒介せられる人間の共同体」としての「経済なるもの」がいかなる経路によって誕生し得たのかについて，ビュッヒャーが説得的な議論を展開させていない点を福田は指弾する。福田によれば，この問題は，「僅かなる断簡零墨的記録や報告を無理に突き合わせ，其の足りない所は想像や推測を縦横無盡に振廻して此れを補綴」するような分析手法のみならず,「進化論的共産主義的有機説」

---

[12] 民衆娯楽の研究で知られる權田が『国民経済の成立』の訳業に携わった経緯については，同訳書の序のなかで次のように記されている。

> 私が学生時代に最も愛読した書が二つあった。其の一は Karl Bücher: Die Entstehung der Volkswirtschaft（ビュヒァー著「国民経済の成立」）で，他の一は Heinrich Waentig: Wirtschaft und Kunst（ウェンティヒ「経済と芸術」）であった。此の二箇の経済学者の好著は遂に私をして『価値の芸術的研究』という卒業論文を草せしむるに至り，美術工芸論に私の研究の帰結を発見せしむるに至ったのである。私がビュヒァーの該書を翻訳しようと思い立ったのは已にその時代からであった。

また邦題に「経済的文明史論」と付けた理由について，權田は次のようにいう。

> 版を重ぬるに伴れて〔中略〕根本思想には毫末の変化はないしにしても，其の形式には変化が生じている。而已ならず経済学の文献に素人なる人々にとっては「国民経済の成立」という名は本書全体の概念を把捉するに少々不便の感がある。茲に於て私は「経済文明史論」という原書の何処の頁にも表されて居ない全々別の名を以て之に冠することにした。蓋しビュヒァーの意，経済的文明の側面を抽出し来って，以て人類進化の後を整理せんとする史論を草せんとするにあったのであると忖度し得らるるが故である。

[13] 福田「経済進化論緒言」，467 頁。

[14] 福田徳三『流通経済講話』（大鐙閣，1925 年），179-181 頁。

としての経済発展段階論と，「自然法の個人主義観に近い」「個人的食料探求時代論」との間の「著しい思想上の隔たりに存する」。「此の両説の不一致，其の解け難い矛盾あるを覚ったことに」より，福田は「〔ビュッヒャー〕先生の説を捨てなければならぬ必要を痛切に感じ始めた」のである[15]。

こうした経緯を経て著されたのが，「カエサル及タキトゥスによる古独逸土地共有制度」である。同論考は，19 世紀ドイツで一世を風靡した「耕地共同体 Feldgemeinschaft」論を，ゲオルク・ハンセン Georg Hanssen（1809 － 1894 年）の学説を主たる対象として批判的に再検討したものである。藤田幸一郎によれば，プロイセン近代化改革の一環としての「農民解放」に対するアクチュアルな問題意識を背景に，「19 世紀全般にドイツほど耕地制度史の研究が盛んに行われた国は他になく，ヨーロッパ最高の研究水準を築いたといっても過言では」ない[16]。

なかでも大きな影響力を有していたのがハンセンの耕地共同体論であり，カエサルの時代におけるゲルマン民族による土地の「総共有」，毎年の「耕地転換」，そして耕地の「共同耕作」がその骨子をなしていた。福田はハンセンが依拠したカエサルの『ガリア戦記』とタキトゥスの『ゲルマニア』を再検討した結果，「土地共同所有の存在を認むるよりも，むしろ土地所有なる事実も観念も全然古ドイツに存在せず，土地は所有の目的として毫も考えられおらず，また取り扱われずと認むるの当を得たるが如し」，という結論を導く[17]。この結論は，ハンセンを中心とする耕地共同体論に対する批判のみならず，それを前提とする「進化論的共産主義的有機説」としてのビュッヒャーの経済発展段階論に対する批判へとつながることは前述の通りである。

ビュッヒャーに対する福田の批判は，こうした史料上の問題にとどまらず，経済発展段階論の問題設定のあり方そのものにまで及ぶ。再び『流通経済講話』の第 3 章に立ち戻ると，「欧州人が，進化の順序上すべての人類が早晩到達すべき最高の階級に自から在るものと考えまして，他の民族はいずれもそれより下段に在るものと認め，文明の種類の相違と云うことを殆んど全く度外に置き，唯だ階段別の上下の相違があるのみと即断する」，「欧州人の自惚れの弊」に対する注意が喚起されている[18]。いわゆるヨーロッパ中心史観の克服である。だが，その先に，いかなる経済史学のあり方を探求すべきかについて福田は語っていない。

この問題については，東京高等商業学校・東京商科大学における福田の同僚三浦新七（1877 － 1947 年）の学統に連なる増田四郎（1908 － 1997 年）が一つの明確な道筋を示している。1962 年に公刊された論文「地域史研究の効用と限界」がそれである。この論考によれば，二度の世界大戦による「ヨーロッパの没落」は，ヨーロッパの歴史学界にも根本的な変化をもたらした。経済発展段階論に典型的にみられたように，ヨーロッパを普遍史的な理論枠組みのモデルとする見方が放棄され，歴史学の新たな体系の模索が始まったのである。そうしたなかで増田が注目したのが，個別地域の歴史的実態に即した政治体制，法制，経済制度の形成過程についての理解を深めることを通じて，旧来の社会科学や歴史学の体系及び概念を再吟味しつつ，「真に綜合的に，特定地域の生きた姿を再現・追体験し，現在のわれわれにとって問題となる史実の実証を通じて，いま一度新しい綜合に協力すべき」方法論としての地域史だったのである[19]。

---

[15] 同上，184-186 頁。
[16] 藤田幸一郎『ヨーロッパ農村景観論』（日本経済評論社，2014 年），66 頁。
[17] 福田徳三「ケーザー及タキトスに拠る古独逸土地共有制度」同『経済学全集第 3 集　経済史経済学史研究』（同文館，1925 年），361 頁。
[18] 福田『流通経済講話』，188-189 頁。
[19] 増田四郎「地域史研究の効用と限界」『一橋論叢』第 47 巻第 3 号（1962 年），243 頁。

増田は地域史の方法論を用いて，「特殊ヨーロッパ的なるもの」を追及する独自の社会史像を打ち立てた。増田のいう「特殊ヨーロッパ的なるもの」とはヨーロッパ社会の「基層文化」であり，その本質は，客観的な法に裏打ちされたデモクラシーの原理である。増田によれば，この原理の淵源は，古代ゲルマン社会の「ヘルシャフト Herrschaft」と「ゲノッセンシャフト Genossenschaft」の対抗関係のなかで培われた，支配者と被支配者との間の「誠実関係」，すなわち「相互的な義務づけの理念」にまでさかのぼり，それが中世から近世を通じて支配者による法や慣習の侵害に対するチェック機能として連綿と受け継がれ，近代の議会制民主主義へといたったのである[20]。

さらに 1970 年代に入ると増田は，高度経済成長以来の画一的な国土開発によって各地域の基層文化が失われていくことに危機感を覚え，多様な地域の自律性を守ることを求める「地域主義」を提唱した。地域主義とは，地域を「エコロジカルなユニット」として捉え，比較史的観点より，日本の近代化の歩みを，「特殊ヨーロッパ的なるもの」から析出した「ヘルシャフト」と「ゲノッセンシャフト」の関係に即して検証し，「多様な諸地域の在り方を，地域住民の自主的・主体的な意欲の盛り上がりとともに，それぞれ特色あるものとして自覚にもたらす思想」であった[21]。さらに増田は，1976 年に経済学史家の玉野井芳郎（1918 － 1985 年）や農業史家の古島敏雄（1912 － 1995 年）らとともに地域主義研究集談会を結成し，地域主義の啓蒙と実践を全国規模で展開させ，各地で大きな反響を呼んだ。経済発展段階論の超克は経済史学の方法論の枠を超えて，実践的社会運動へと結実することとなったのである[22]。

おわりに

増田は，福田の『流通経済講話』が出版された翌年の 1926 年に東京商科大学附属商業教員養成所に入った。増田は折にふれて商業教員養成所時代の「思想遍歴」が学問の道を歩む契機となったと語っているが，その当時の学生生活について次のように回顧している。

> 当時日本の学界のもっとも指導的な立場にある先生方の講義が聞けた。福田徳三，左右田喜一郎，上田貞次郎などという大先生に直接お目にかかれるだけで，講義の内容がよくわからなくとも，私たちは大きなよろこびと誇りを感じた[23]。

増田が，福田の講義のなかでビュッヒャーの経済発展段階論に対する批判を直接耳にしたかは定かでない。だが間接的にとはいえ福田が，自身の未完の課題，すなわち経済史学における経済発展段階論の超克を果たすこととなる後進の育成に寄与したことだけは否定できないであろう。

（一橋大学社会科学古典資料センター教授・一橋大学大学院経済学研究科教授）

---

[20] 増田四郎『ヨーロッパ中世の社会史』（岩波書店，1985 年），第 6 講。

[21] 増田四郎『地域の思想』（筑摩叢書，1980 年），20-21 頁。

[22] 増田の地域史論，「特殊ヨーロッパ的なるもの」，そして「地域主義」論のそれぞれの概要と，それらの議論が展開された背景については，拙稿「『特殊ヨーロッパ的なるもの』から地域主義へ―増田四郎の地域史構想―」森宜人・石井健（編著）『地域と歴史学―その担い手と実践―』（晃洋書房，2017 年）を参照。

[23] 増田四郎『歴史する心』（創文社，1967 年），255 頁。